IV. 道徳からの逃走

IV-1 序論　神のゆくえ

応仁の乱による祭祀廃絶ののち、誰が祭祀をつづけていたのだろうか？

- 豊臣政権……豊氏長者として、国家祭祀を一手に引き受けるも、家康により滅亡。
- 徳川政権……儒学を正統としつつも、孔子を祀るわけではない。祭祀については仏教に依存。個々の家ごとにばらばら。[祭　不　致]。

★　民衆の存在

- 祇園会（祇園祭）……京都の町衆の手で復活。
- お蔭参り……爆発的流行。応仁の乱以前は入れなかった伊勢神宮に入れるように。御師が神札を売ることによる民衆の金銭に依存して神宮を維持するようになる。
  - → 幕末のお札降り、いわゆる「ええじゃないか」、廃仏毀釈は、民衆の力の誇示とみることができる。
  - → のちの「国民の天皇」（北一輝）を準備する民衆的運動といえる。

IV-2 神なき近世道徳

★　朱子学、新しい国家の正統性

『資治通鑑綱目凡例』によれば、一度でも帝位の継承がおこなわれれば正統とみなす。

- → 祭祀の質や実践性ではなく、血の継承回数を重視。
- → この正統論では、皇統一系を誇示する日本の皇室は傑出した存在。北畠親房『神皇正統記』
- → ただし、『神皇正統記』はけっして血統を受け継ぎさえすれば（「継体」）正統としているのではない。南北朝期までは依然、身体性と精神性の両者は一体。『正統記』の表現でいえば、「神代より継体正統のたが(違)はせ給はぬ一はし」（光孝天皇条）。

★　林羅山の神儒合一論、秀吉の「神国思想」の乗り越え

天照大御神を「天照大神」とし、日本における尭舜（聖人）に比定。

- → アマテラスは人間であり、道徳的存在として、神道を儒学化。
  （国際的な儒学の理念では、日本の国生み神話は通用しない。）

★　新井白石の神＝人論

神とは人也。我国の俗凡其尊ぶ所の人を称して、加美といふ。古今の語相同じ、これ尊尚の義と聞えたり。今字を仮用ふるに到りて、神としるし上としるす等の別は出来れり

古語に播羅といふは上也とはたとへば日本紀に川上の字を讀ンで箇播羅といふがごとし今も常陸ノ國海上に高天浦高天ノ原等の名ある地現存せり

新井白石『古史通』

- → 高天原＝常陸。俗凡（庶民）の神を尊ぶ点において、これは道徳的利用価値があるが、現実には昔の人、というほかない。いかに「太古朴陋の俗」（古く素朴で卑しい習俗）を取り除いて歴史を読むか？

★　身分制（家）社会の道徳

天の蒸民を生ずる、物有れば則有り。民の彝を秉る、是の懿徳を好む（天に民が生じるならば、そこに万古不易の法がある。民の則らんとする法は、自然に横溢する徳である）

『詩経』

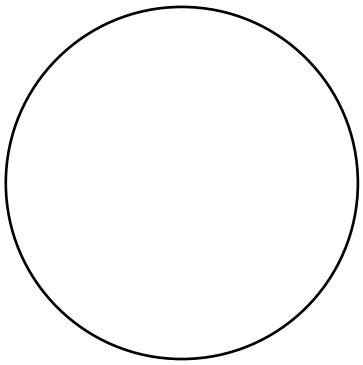
それがしの聞くところ、天は蒸民を生んだが、かれらは自ら統治することができなかった。ために天は王者を立て、かれらを統治させたのである。あまねく海内(天下)を統治するのは天子のためではなく、領土を設けて封建するのは諸侯のためではない。みな蒸民のためである。人統・地統・天統の循環する暦法を設け、それに対応する夏殷周三王朝を交替させ、無道の天子を除き有徳の天子に委ねて、天下を一姓の私有物としなかったのは、天下はすなわち天下の天下であって、一人の天下ではないことを明らかにするものである、と。

『漢書』（巻 85）

★　儒教（朱子学＝宋学）道徳とは？

理・道・徳・性・心・気・情・欲……

「上下定分の理」（朱熹）



★　伊藤仁斎の「血脈」

学問の法、予岐つて二と為す。曰く血脈、曰く意味。血脈は、聖賢道統の指を謂ふ。孟子の所謂る仁義の説の若き、是れなり。意味とは、即ち聖賢書中の意味、是れなり。蓋し意味はもと血脈の中より来る。故に学者当に先ず血脈を理会すべし。若し血脈を理会せざるときは、則ち猶ほ船の柁無く、宵の燭無きがごとく、茫として其の底り止まる所を知らず。然れども先後を論ずるときは、即ち血脈を先とし、難易を論ずるときは、則ち意味を難しとす。何ぞなれば、血脈は猶ほ一条路のごとし。既に其の路程を得るときは、則ち千万里の遠きも、亦た此より致る可し。

道はなお路のごとし。人の往来するゆえんなり。故に陰陽こもごも運る、これを天道と謂う。剛柔相須うる、これを地道と謂う。仁義相行なわるる、これを人道と謂う。

『語孟字義』

★　荻生徂徠の「作為」

先王の道は、先王の造る所なり。天地自然の道に非ざるなり。

『弁道』

→　道（＝神）は自然／実在なのか？ それとも作為／制作／虚構なのか？

Ⅳ-3 本居宣長の天才――「生成」の世界

★　宣長と源氏物語

宣長の思想活動を二つに分けるとすれば、源氏物語をあつかった前半生と、古事記をあつかった後半生とになることに、多くの者が同意するだろう。

大よそ此物語五十四帖は、物のあはれをしるといふ一言にてつきぬへし、…猶くはしくいはは、世の中にありとしある事のさま〳〵を、目に見るにつけ耳にきくにつけ、身にふるゝにつけて、そのよろつの事を心にあぢはへて、そのよろつの事の心をわか心にわきまへしる、此事の心をしる也、物の心をしる也、物の哀をしる也。

『紫文要領』

- → 源氏物語の「本意」を「物の哀れを知る」の一点に集約させている。
- → 「阿波禮(アハレ)といふは。深く心に感ずる辞(コトバ)」(『石上私淑言』)であり、ものに触れて心の動くことをいう(「情(ココロ)はうごきてしづかならず」『同』)。彼があげる事例は、「桜の盛りに咲きたる」、「人の重き憂へにあひていたく悲しむ」、「悪しく邪なる事」、「四季折々の風景、はかなき木草鳥獣」、「火」、「空の気色」などであり、「同じ義理にして、その事によりてかやうに表裏の相違あること」(以上『紫文要領』)、すなわち同じものの時に応じた変化であり、またそれに対してひとによってさまざまに異なる実感のありようを指していわれる言葉。
- → 宣長の「ものゝあはれ」は、後期王朝時代の用語例を超えた考えを「はち切れる程に押しこんで、示されたもの」(折口信夫)。

★　蛍の巻～物語と真実～

長雨に絵物語を読み耽る玉鬘をみて、源氏は虚構にわざわざ騙されようとしている、とからかう。

- → 鬘の反論。「げにいつはり馴れたる人や、さまざまにさもくみはべらむ。ただいとまことのこととこそ思うたまへられけれ」。
- → 源氏の答え「ひたぶるに虚言(そらごと)と言い果てむも、ことの心違ひてなむありける」。

「よきもあしきも、世に経(ふ)る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて、言ひおきはじめたるなり」。

★　道ならぬ恋

最大の「あはれ」が恋愛。源氏のように、容姿、血筋、才気、どれをとっても完璧な男でも、恋に囚われれば「道」をあやまる。その「あはれ」を丸ごと肯定することが、源氏物語を読むということ。

色欲ハ、スマジキ事トハアクマテ心得ナカラモ、ヤムニシノビヌフカキ情欲ノアルモノナレハ、コトニサヤウノワザニハ、フカク思ヒ入ル事アル也、…色ニイデ、アルハミダリガハシキ道ナラヌワザヲモスルハ、イヨ〳〵人情の深切ナル事、感情フカキ歌ノヨツテ起ル所也、源氏狭衣ノアハレナル所以也

『排蘆小舟』

★　宣長と古事記

【宣長の神の定義（１）】

迦微(かむ)と申す名義(なのこころ)は未(いまだ)思得ず。さて凡て迦微とは、古御典等(いにしえのみふみども)に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀(まつ)れる社(やしろ)に

坐御霊をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獣木草のたぐひ海山など、其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり。

本居宣長『古事記伝』

→ 神を定義していない。むしろ「定義」を離れていくもの。

【宣長の神の定義（2）】

或人問ふ、然らば皇国の道は自然かと。己云ふ、皇国の道も自然にあらず。然れどもまた人為にもあらず。

『古事記伝』

→ 神は人間ではないが、だからといって神はそれ自身として、天地自然のように物体的に実在するわけでもない。

【宣長の神の定義（3）】

人の行ふべきかぎりを行ふが人の道にして、そのうへに、其事の成と成ざるは、人の力に及ばざるところぞ。

『玉くしげ』

→ 宣長が神のために用意したのは、「成」、すなわち生成変化の世界である。

世間に有とあることは、此天地を始めて、万の物も事業も悉に皆、此二柱の産巣日の大御神の産霊に資て成出るものなり。

『古事記伝』

→ 宣長が重視したのは、生成神であり、「事志有禮婆宇禮志迦那志登時時尓動心」（『玉鉾百首』）。

→ けっして不動の死者を重視したわけではない。「あはれ」はむしろ生を願いながら死ぬ人間の営みにこそある。

→ 「さてさやうに、世中のありさまのうつりゆくも、皆神の御所為なるからは、人力の及ばざるところなれば……」（『玉くしげ』）。「うつりゆく」ことに注意を促す。

→ 「生成」の語の日本史上の初出は、古事記における伊邪那岐大神伊邪那美大神の国生みのくだり。伊邪那岐の涙ないし目脂から生まれた天照大御神や月讀命にせよ、鼻水から生まれた建速須佐之男命にせよ、神々のなす新陳代謝のはたらき。垢（禍津日神）や尿（弥都波能売神、水の神）や屎（波邇夜須神、土の神）も神格化される。神でさえ、変化のただなかに身を置く。人格（偶像崇拝）でも物格（物神崇拝）でもない、変化それ自体を指していう。だから、宣長は神の定義を避けた。定義というやり方では、生成変化を捉えられないから。